「新生ＪＲ東労組運動宣言」にもとづいた職場活動の教訓

地本の垣根を越えて職場の問題を組合員と共有し組織の強化をかち取る！

乗務員基地再編成について

2018年12月に乗務員基地再編成計画が発表され、輸送の安定性を維持しつつ、効率的な業務体制の観点から、地方における乗務員基地再編成として「弘前運輸区の規模及び乗務範囲の拡大」「青森運輸区・大館運輸区の廃止」が盛岡・秋田の両支社から示されました。ダイヤ改正時には、弘前運輸区が「つがる運輸区」に名称変更となりました。

青森支部・能代支部・弘前支部の3支部は、地本の垣根を越えて、奥羽北線のお客さまの利用状況やダイヤの課題等を話し合い、よりよいダイヤを実現するため、2017年5月に支部間交流を行って以降、定期的に支部間交流を開催してきました。乗務員基地再編成計画が発表されてからは、基地再編に向けた議論を中心に行ってきました。

会社施策によって、支社間異動など生活環境の変化が避けられない中で、青森運輸区分会・大館運輸区分会・弘前運輸区分会の各分会では、組合員との議論を通じて、施策を自らがつくり出していくという教訓的なたたかいをつくり出しました。

盛岡地本・青森運輸区分会のたたかい

2016年に北海道新幹線が新函館北斗駅まで開業し、青森運輸区の業務内容が大きく変化しました。その頃から、多くの組合員は青森運輸区の将来に不安を抱いていました。そして、乗務員基地再編成が示されたことで、職場では諦め感が漂い、モチベーションが低下しました。

当初、職場集会等で意見を集約した際も、職場廃止を受け入れられない感情や、失望感が多く語られ、職場廃止まで約1年という期間を青森運輸区分会としてどのように向き合い、全組合員で乗り越えていくのか悩み、葛藤してきました。

一方で、弘前運輸区分会や大館運輸区分会の仲間との意見交換の場でも、職場現実がある中で、どのように議論を進めればよいのかという悩みを共有してきました。その後分会は、組合員の意見を反映できるように、乗務員基地再編成に向けた諸問題を組合員と共有し、議論を進めてきました。

また、盛岡・秋田地本とも相談し、社員への施策説明に関する意見や、教育に関わる疑問点に加え、転出に対する不安の声を、要求へと高め、団体交渉で議論をつくり出しました。そして、組合員に議論経過を逐次伝え、仲間との議論を繰り返し行い、乗務員基地再編成までの日々を全組合員で考え、つくり出してきました。

全組合員の運動としてつくり出した根拠は、悔しさと諦め感の中でも、施策に向き合う分会組合員の力があったからです。施策の課題と向き合い、共に悩み、考えてきたことを全組合員と職場全体で共有してきた結果として、乗務員基地再編施策を私たちからつくり出したと感じています。

秋田地本・大館運輸区分会のたたかい

大館運輸区分会の組合員は、他の乗務員基地との位置関係を考えると、いずれ廃止になるのではないかと危機意識を持ち、これまで寝台特急の乗務やロングランなど区の存続のため積極的に奥羽本線の輸送を担ってきました。

しかし、現実的に乗務員基地再編成が示され、組合員の施策に対する受けとめ方は、正直「ついに来たか」という意見が多く、当初は諦め感が先行していました。さらに「大館の地に雇用を残していくべきである」という施策に対する反対意見と、「反対だけでは、組合員の雇用・生活を守るのは厳しい。担っていくための議論をしていくべき」と組合員の意見が二分化していました。特に地元組合員からは「労働組合なのに廃止ありきで話をしていないか。一切反対しないのか」といった厳しい意見も出されていたのが現実です。

自分たちの職場や仕事が、どう変化するのか見えない中での不安が大きかったことが特徴的でした。

分会では、早急に職場集会を開催して組合員の意見集約を行いました。二分化された組合員の声から分会方針をつくり上げていくこと、分会を一つにまとめていくことが非常に難しく、手探り状態で迷いながらではありましたが、一つひとつ課題を乗り越えてきました。

分会役員間にもあった「廃止の諦め感」をまずは払拭すること、大館運輸区単体で見るのではなく、今後の秋田支社や乗務員のあり方が大きく変わろうとしている現実から目を背けないことが重要です。そのために、「施策が進んでいく以上、自分たちが少しでも働きやすい施策を組合員と共につくり上げていくこと」を分会方針として掲げ、運動を積み上げてきました。

組合員の率直な意見を封殺せず、繰り返し議論の場をつくり出すことで組合員の意識が変化してきました。今後の秋田支社や、次なる乗務員基地再編成、大きく変化している業務のあり方に対して、自分たちだけ変化しないのであれば取り残されていくという危機感から、「このままではダメだ」と自分たちの仕事を捉え返すようになるまで、問題意識が高まりました。このことからも運動が前進し、組織が強化されていると実感します。

秋田地本・弘前運輸区分会のたたかい

弘前運輸区分会では、当初はどうしても「受け入れる側」という意識があり、職場が廃止になる大館運輸区や青森運輸区で働く仲間の想いに立つという感覚が当初は弱かったというのが、正直なところです。

青森運輸区からは支社を超えて、そして覚悟をもって弘前運輸区に来る仲間の想いや葛藤を目の当たりにして「受身の姿勢では良い職場はつくれないのではないか」と組合員に提起しました。

そして、分会としてやるべきことは何かを明確にしてきました。具体的には、新たな線区の乗務員訓練や、職場施設・環境などの課題を明確にし、分会で組合員と共に職場運動をつくっていくことで組織の強化を目指しました。

訓練に関して、転入者に対する教育期間も「省令で定められている5往復」というこれまでより大幅に少ない内容が示されました。組合員からは、スケジュール優先で安全が蔑ろにされていると不安・不満が多く出されました。それに対して、最初から無理だと言うだけではなく、まずその期間で自分たちが一生懸命覚える努力をし、それでも不安がある場合には、一人ひとりが会社に伝えていくことを分会で意思統一して進めてきました。

役員だけではなく、組合員にも直接訴え続けて実践したことで、訓練期間の延長やフォローの追加を実現することができました。

このように、職場問題の解決に向けて組合員との議論を丁寧に行い、そして積み上げることを通じて、当初の「受け入れる側」という意識から少しずつ変化をしてきました。中には、組合員自らが職場で問題意識を投げかけ、大館運輸区や青森運輸区で出ている意見を職場で積極的に議論し、どのように解決していくべきかと全体化する仲間もいました。

弘前運輸区から「つがる運輸区」に名称変更になって以降も、組合員と共に運動をつくり出すことにこだわり、運動を通じた組織強化をかち取ることができました。

新生ＪＲ東労組運動宣言を職場の仲間と共に実現しよう！

青森運輸区分会・大館運輸区分会・弘前運輸区分会、全てに共通して言えることは、現実から目を背けず、組合員の声を聞き、議論の場をつくることにこだわったことです。そして、組合員から出された意見をまとめて要求へと高め団体交渉を行い、交渉経過をいち早く組合員へ返していくという、職場活動の基本を徹底的に繰り返したことです。そのことを通じて、地本と職場との距離感が近くなったこと、施策に対する組合員の向き合い方が変化をしました。

また、組合員に寄り添い、不安解決に向けて真剣に取り組んできたからこそ、さらに人間関係が構築されました。現在は、新たな職場で、新たな仲間と共に、安全で働きがいのある職場づくりに向けて奮闘しています。

私たちは乗務員基地再編成のたたかいを学び、施策に向き合い、自らの手で安全・安心な職場をつくり出していかなければなりません。そのためにも、「新生ＪＲ東労組宣言」のもとに、ＪＲ東労組運動の発展のため、多くの仲間と共に運動をつくり出していきましょう！